ことが認められる。

註(1) 濱田隆氏や中野玄三氏は、『紀伊続風土記・高野山之部』の「上人住定中：上人、蓮花三昧図(別に在り)を密す」(続真言宗全書三七卷、二九四頁上段)の文を、蓮華三昧院伝来の阿弥陀三尊絵像について述べたものと見、明遍が観想念仏を中心行としていたことの根拠としている。(濱田隆「蓮華三昧院阿弥陀三尊像と明遍を巡る浄土教」仏教芸術五七号、一〇一頁、中野玄三『来迎図の美術』一七六—一七七頁)だが、この文は蓮華三昧院伝来の阿弥陀三尊絵像とは別の図について述べていると見るべきであろう。

註(2) 「他力者還弥陀名号云也。此三心具足云也」(『別異弘願集』)との記述もあるが、これも前後を読めば自力的な信理解を前提として説いた文であることがわかる。

「五悪段」生成に関する一試論

加藤 弘 孝

《無量寿経》系統の經典にある「(三毒)・五悪段」という長文をめぐって、二つの学説が存在する。それは『梵本』、『藏本』にその存在が確認できず、また中国的色彩が色濃いことから、中国において付加がなされたとする学説と、あくまでインド成立を主張する学説である。両説ともにそれぞれ理があるため、現時点で確定させることは難しい。しかしながら「五悪

段」に中国的要素が多分に見られることは、紛れもない事実であり、中国的要素を考察することが、この問題の解決の糸口となることは間違いないところであろう。従って本論においては、幾つかの中国的要素を確認しながら自説を展開していきたい。

「五悪段」が存在するのは『大阿弥陀経』、『平等覚経』、『無量寿経』の三本であるが、本論では最古の訳本だと考えられる『大阿弥陀経』を典拠とする。ここには中国における歴史的実が一部反映されていると考えられるのである。すなわち「五悪段」には、「興兵作賊、攻城格闘、劫殺截断、強奪不道」と戦乱の記述があり、また、「自大尊貴、有道、横行威武、加権力勢、侵剋易人、不能自知為悪」と武力、権勢をもって、他人を屈服させるという一文があり、更には、「無悪歳疾疫、無病瘦者、兵革不起、国無盜賊」と飢饉、疫病、戦乱、盜賊などの記述が見出せるのである。そしてこれらは『後漢書』や『三国志』といった正史に記述される世相と一致する。両者の一致については、訳者の支謙によるものだと筆者は想定している。続け様に起こる戦争、疫病、天災などは否応無しに人々の生活水準を引き下げ、社会道徳を後退させたのである。この世相をまざまざと目撃した支謙が「五悪段」生成に関わったことは大いに有り得ることである。

問題は関与の比重である。先達が主張する様に全体を丸々、支謙が創出した(「五戒」を練った)のであろうか。しかしこれについても単純ではない。何故ならば、「五悪段」は、『大阿弥陀経』に限っていえば有機的な存在であり、とりわけ「流通

第8部会

分」とは連動しているとも考えられるからである。例えば「五悪段」に出る、「當曼仏世、堅持經道、無敢遺失」という一文は、「流通分」に存在する「若曹當堅持之、無得為妄増減是經法」という一文と、同趣旨であり、両者共に經道、經法を堅持することを勧めている。これは、「五悪段」と「流通分」の底辺に流れる主題が同じであることを示す証左の一つである。

更にいえば「五悪段」全体が「流通分」の伏線的叙述であるとも考えられる。すなわち「五悪段」において、内省的に悪や苦が説かれた直後に、「流通分」で救済が説かれて締め括られるというのは、一般的な大乘經典撰述の手法に一致すると考えられるのである。

これらを考慮するならば「五悪段」は『大阿弥陀經』の構成上、異質な存在ではなく、一貫した主題のもとに著述されたものだということになる。では支謙の関与が明確であるにも関わらず、こうした一面が見られるという矛盾をどのように説明すれば良いのだろうか。ここからは試論の域を出ないが、恐らく「五悪段」の原型が原本にあったのだろう。そしてその箇所には何らかの危機を意識せしめる思想が説かれており、眼前の痛ましい現実を直視した支謙によって、「五悪段」は危機思想が濃厚な一段に再構築されたのである。或はその原型とは「五戒」に関連するものだったかもしれない。そうすると「支謙伝」にある「更練五戒」という伝承に対しても得心がいく。なお、その場合、「練」の目的語は戒律の「五戒」そのものではなく、『大阿弥陀經』の「五戒」に関連する箇所（「三輩段」と「三毒段」の中間部と特定）となろう。この説が正しいと仮定

するならば、支謙が大乘經典撰述者達の苦難の記述をもとにして、内的に深化させた可能性すらも出てくるが、拙論が試論に留まる以上は、これを以って擱筆とせざるを得ない。

一条兼良『勸修念仏記』とその時代

龍口恭子

一条兼良（一四〇二—一四八一）は室町時代を代表する知識人であり、その著作は文学・歴史・宗教・有職など、あらゆる分野に亘る。

この希有の文化人はまた仏教に深く帰依し、七十二歳の時に出家し、法名を覺惠といった。出家の十年前に『勸修念仏記』を著している。この『勸修念仏記』は宗派仏教の研究が中心の従来の仏教学の研究分野からは取り残された形で、二、三の論究にとどまる。それは宗祖・列祖、あるいは名僧・高僧の著作でないために、研究対象とみなされなかつたのであろうし、また仏教においての室町期という時代性にもよるであろう。

しかし文人によって書かれた優れた仏教書を持つ日本の伝統があり、また室町時代は平安、鎌倉時代という独自の仏教思想を生んだ時代ではなかつたものの、上下を問わず、仏教信仰が盛んに行われ、且つその実態は詳しく記録されている。

本論ではこの『勸修念仏記』の思想を概観し、これを生んだ室町中期という時代との関係について考察して行く。